父なる神を信ず　　ヨハネ 14:1-7

今日は父の日ですね。５月第二日曜が母の日ですが長らく私は母の日だけでは不公平だからだれかが後で父の日を決めたのだと思っていました。しかし母の日が始まったのは 1908 年５月で父の日は 1910 年６月ということで 1,2 年しか変らないんですね。ですから父の日というのは後でおまけのように加えられたものではなく、それなりの起源と意味があることを知り安心しました。ところで聖書には神が父なる神と呼ばれ、使徒信条においても「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」と告白するように父ということばが用いられています。今日は神を父と呼ぶことの意味について聖書から学んでゆきたいと願わされます。

１．私たちの神は人格的なお方である。

使徒パウロがアテネに滞在していたとき、「アレオパゴス」というところでイエス・キリストを証しする機会が与えられました。アテネの人々は数多くの神々を崇拝し、彼らが知りうるかぎりの神々のために祭壇を築いていました。そればかりでなく、自分たちがまだ知らない神もあるだろうからと、「知られていない神」のためにも祭壇を築いていたのです。それを知ったパウロは、彼らにこう話しはじめたのです。「アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。私が道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られない神に』と刻まれた祭壇があるのを見つけました。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるものを、教えましょう。」（使徒 17:22-23）と語ったと書かれています。

もし、パウロが日本で伝道したとしたら、同じように説教しただろうと思います。日本には、アテネに劣らず数多くの神々があって、いたる所で祀られているからです。日本の神々は「やおよろずの神々」と呼ばれますが、「やおよろず」は漢字で書けば「八百万」ですから、文字通り八百万もの神々がいることになります。ですから、日本で、「私は神を信じています」と言ったところで、「ああ、そうですか」と言われるだけで、おそらく何の抵抗もないでしょう。日本人の多くは、あらゆる「神」を受け入れますが、とくにどの神を信じるということはしないからです。私も幼い頃、祖母に連れられていろんな神社仏閣を訪れてはお参りしていたことを思い返します。そしてそこで何が祭られていたのかについては全く記憶がありません。

使徒信条で「全能の父なる神を信ず」というとき、その神はアルファベットの大文字の神です。英語では「神」は小文字の “god” ではなく大文字で始まる “God” が使われます。小文字の “god” は一般名詞、つまり神と呼ばれるようなもの全体を意味していますが、大文字の “God” は固有名詞です。キリスト者が「神を信じる」というとき、それは「神」という概念を受け入れるということではなく、“God” の名で呼ばれるお方、そのお方のご人格に信頼するということを意味しているのです。

もしもキリスト者がそのような意味で「私は神を信じます」と言うと、つまり「このお方だけを信じます」と言うと人々はいやな顔をして「そんなことは聞きたくない」と言われるか、アテネの人々がパウロに言ったように「このことについては、またいつか聞くことにしよう」（使徒 17:32）と言われてしまうことでしょう。さらに「私はこの神を信じます」と表明すると反対が起こってくるでしょう。実際、初代のキリスト者は、その信仰告白のゆえに「無神論者」と呼ばれ、迫害を受けたのです。神を信じるキリスト者が「無神論者」と呼ばれたのは、おかしなことですが、それは、キリスト者がギリシャやローマの神々を信じなかったからです。

しかし、まことの信仰者は、「私は神を信じる」との信仰の告白をやめませんでした。なぜなら、明確な神への信仰、ご人格である神への信頼なしには人は救われないからです。神への真実な告白を保つ者、また、失敗やつまずきがあったとしても、この告白に立ち返る者だけが救いの確信を得ることができるか

らです。もし、信仰者がこの告白をあいまいにしてしまったら、誰が、まことの生ける神を知ることができるでしょうか。信仰者が神を真実に告白することがなければ、神は、人々にとって「知られない神」のままになってしまうのです。私たちは、いつ、どんなときも、明確に、「私は神を信じます」と告白する者でありたいと思います。

２．すべての父なる神

「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」とあるように、使徒信条は、神を「造り主」、また「父」と呼んでいます。この部分は、ラテン語の語順では、「神、父、全能、造り主」の順になっています。私たちの信じるお方は、まず「神」と呼ばれ、次に「父」と呼ばれ、それから「造り主」と呼ばれています。

この場合、神はどういう意味で「父」と呼ばれているのでしょうか。それは、第一に、神が「天と地」、つまり、あらゆるものを創造されたお方、万物の源であることを示しています。ヒポクラテス（460-370 BC）は「医学の父」、ニュートン（1643-1727）は「近代科学の父」、バッハ（1685-1750）は「音楽の父」、アダム・スミス（1723-1790）は「経済学の父」、ピーター・ドラッカーは「経営学の父」と呼ばれています。日本にも、さまざまな「父」がいます。たとえば、嘉納治五郎は「柔道の父」、柳田國男は「日本民俗学の父」と言われています。これらの人々が父と呼ばれるのは、それまでは無く、その後も長く続くようになったものを生み出したので、「父」と呼ばれているわけです。そして神を父と呼ぶのはあらゆるものの根源であるお方、源となっているという意味においてです。

次に神が「父」と呼ばれるのはイエス・キリストの父だからです。神が「創造者」として「父」と呼ばれるのは、「父のようなお方」「全てを創り出す根源」という意味ですが、「御子の父」という場合、神はほんとうに「父」なのです。御子が人となってお生まれになったのは、今から二千年前のことですが、その時はじめて御子が存在されるようになったのではありません。御子は永遠の先に父なる神から「生まれ」、父なる神とともにおられたのです。御子は造られたお方ではなく、むしろ、父なる神とともに世界を創造された方です。ヨハネ 1:1-3 に「初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない」とある通りです。また「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています」コロサイ 1:17 とも書かれています。御子は造られたお方ではないのです。しかし人間の言葉では父から「生まれた」としか言いようがないのです。聖書は神は、この世界を創造される前から、御子の「父」、「父なる神」そして「御子」であられたのです。

また神が父であることは、神が愛のお方であることを物語っています。親が子を愛すること以上に大きな愛はありません。神は創造主として、ご自分のお造りになった世界をいつくしんでおられますが、それ以上の愛を御子に注いでおられます。神は、見ることも聞くことも、感じることもない理念や概念ではありません。心を持たない原理や法則でもありません。神はご人格です。しかも、永遠の先から御子とともにおられ、人知では量り知れない大きく、高く、深い愛で御子を愛しておられる愛の神なのです。神は、その愛を、御子イエスを通して、信じる者に分け与えてくださいます。神を信じるとは、この「愛の神」から愛され、「愛の神」を愛する関係へ導かれ、それを深めていくことなのです。同じ神でありながら関関係性においては父と子に見られる愛の関係性があるのです。

３．イエス・キリストの父

神がイエス・キリストの父であるというのは、他の宗教の人々、とくにイスラムの人々には、とんでもない教えなのだそうです。スコット・ハーンという聖書学者が、イスラムの学者と公開討論会をすることになりました。その準備のため、イスラムの学者と話し合いをしていたとき、ハーン氏が「父なる神は…」と口にしたとたん、イスラムの学者は、すぐに怒りを表して、「神、アッラーは、すべてを超越したお方

であり、神を人間になぞらえてはいけない」と言いだしました。ハーン氏が「イエス・キリストは神の御子であって…」と言うと、「神は人ではないから、子を持つことなどありえない」と反論され、「キリストを信じる者もまた神の子どもとなって神の愛を受ける」と語ろうとすると、「神はすべての者の主人であって、人間はしもべに過ぎない。人間が神を『父』と呼ぶなど、冒涜である」とまくしたてられたというのです。

この話は聖書の教えが一般の宗教とどんなに違っているかを示しています。「ユダヤ教、キリスト教、またイスラム教は『一神教』で、『多神教』から見れば皆同じようなものだ」と良く言われますが、決してそうではないのです。ほんとうの意味で人を愛してくださる神を教え、示してくださったのは、御子イエス・キリストの他ありません。私たちは、御子であるイエス・キリストを通してはじめて、愛の神であることを知り、その愛を受けることができるのです。イエス・キリストを神の御子と信じる信仰なしには、父なる、愛の神を信じることはできません。神の愛が分からず、神を「父」と呼んで、その愛を受けることができないのです。ですからイエスは「神を信じ、またわたしを信じなさい」（ヨハネ 14:1）と言われ、使徒信条は「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はそのひとり子、我らの主イエス・キリストを信ず。」と告白しているのです。私たちは「神」を、「父なる神」として、また、「イエス・キリストの父なる神」として信じているのです。

イエスは言われました「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずです。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです。」（ヨハネ 14:6-7）イエスは、ここで、人はどうしたら道を見出し、真理を学び、いのちを育むことができるかを教えておられるのではありません。イエスが宗教の指導者にすぎなければそういったことを話されたでしょう。よく「キリスト教とはキリストである」と言われますが、まさに、その通りで、イエスの教えの中心はいつでも、イエスご自身です。イエスは「わたしが道である。わたしに従いなさい。」「わたしが真理である。わたしから学びなさい。」「わたしがいのちである。わたしを信じなさい」と言われるのです。

「わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」多くの人は、このことばを「排他的」だと言います。もし、イエスがどんなに優れた人物であったとしても、人にすぎないのなら、このようなことばはきわめて独善的で排他的でしょう。しかし、イエスが父なる神のひとり子であるなら、このことばほど真実なことばはありません。神の御子のことばは父なる神のことばであり、イエスのなさることは、神がなさることなのです。ですから、イエスは「わたしを知るものは父を知り、わたしを見たものは父を見たのだ」と言われ、「永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです」（ヨハネ 17:3）と言われたのです。

「私は神を信じます。」それは「神」という概念を信じることではなく、生ける、ご人格である神に信頼することです。それは、父である愛の神と真実な愛で結ばれることです。そして、そのことは、父の御子であり、人の救い主であるイエス・キリストを信じることによってなされるのです。私たちはイエス・キリストを信じてはじめて、「私は神を信じます。イエス・キリストの父なる神を信じます」と、確信をもって告白することができるようになるのです。